經濟論叢 毎月一日發行
第四十九卷第三號 昭和十四年九月一日發行
大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十九卷 第三號

昭和十四年九月

論叢

新利子論序說……文學博士 高田保馬

英國及び獨逸の所得稅……經濟學博士 汐見三郎

時論

現代日本の革新……經濟學博士 石川興二

世界新秩序の建設……經濟學博士 柴田敬

研究

史記平準書に見はれたる經濟思想……經濟學士 穗積文雄

府縣財政制度の成立……經濟學士 藤田武夫

經營比較の形態について……經濟學士 岡部利良

說苑

原料封鎖に於ける獨逸の經驗……經濟學士 大塚一朗

ドレッシャアの「農業經濟學と農村社會學」……經濟學士 山崎武雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

（禁轉載）

時論

現代日本の革新

石川興二

一　國內革新の急務

今や日本は嘗て經驗しない大規模な戰爭を既に滿二年に亙つて繼續して來たのである。その國民生活に對する負擔だけでも容易ならぬものがある。而も對外的關係も極めて複雜であつて、國際的重壓に遭遇する可能性も多分にある。今尙ほこの戰爭の前途は見込もつかない有樣である。今日の日本は正に未曾有の難局に立つて居り、これを突破し得ると否とが世界史的日本の興亡を決するのである。此際國內革新をなすべきやについても國論は統一されて居ない。或人々は今日日本はかくの如き非常時局に立つて居るのであるが故に變革をしてはいけないと云ふ。その理由は變革は大なる混亂を伴ひ國を危くすると云ふことにある。然しそう云はれる時、變革なるものは如何なる形に於て考へられて居るであろうか。既に述べたるが如く變革には種々な型があるのであるが[1]、現代資本主義的制度の變革は、はじめてマルクス主義に於て實行せられたが爲めにかゝる場合、變革は多くマルク

1) 拙稿『社會問題と國民的性格』本誌八月號參照

ス型、ロシヤ型に於て考へられて居るのである。社會の階級的對立を階級革命によつて變革せんとするこの仕方が著しい國民的混亂を伴ふことは事實である。それは先づ佛蘭西革命に於て見られた。佛蘭西はこの爲めに國民的エネルギーを著しく浪費し、再び革命前の國際的地位を回復し得ず國運は其後次第に傾きつゝある有樣である。ロシヤはこの階級革命の爲めに世界大戰に於て戰敗國となり其後二十餘年の今日に至るも尙ほ反動革命の動搖の中に彷徨ふて居り國內の整備はならず對外的な力も失はれて居る。然し日本には日本的な變革の型があるのであつてそれはかくの如き浪費的なものとは異る。それは大化の改新に於てことに明治維新に於て實證されて居る。

この日本型はマルクス型の分裂性に對し統一性をその特色とするものである。白人の勢力が東洋を席卷して日本に迫り來たあの未曾有の危機に際して、日本は先づその封建制度の下に於ける國內の對立分裂を「天皇を中心とする國民共同體」の立場に於ける變革によつて止揚し一致團結以てこれに當つた。それ故に東洋に於て日本のみは白人の壓迫より自己を守ることが出來やがて世界史に例を見ざる目ざましき發展を遂げ、今日の世界史的な日本となることが出來たのである。若しあの際國內對立をあのまゝにして居たらばどうであつたろうか。既に佛蘭西は幕府方を助け英國は朝廷方を助けんとした、以て國內の分裂對立を激化して國民的統一を奪ひやがて彼等の殖民地化し得たのである。これは彼等の常用手段であつて現に東洋の諸國に施し成功を收めたところのものである。卽ち日本のみが彼等の豫定を裏切つて白人の殖民地化され得なかつた所以のものは、日本がこの危機にあたつて先づ國內變革を斷行して對立を否定し以て一致團結ことに當り得たが故である。このことは今日の危機に

於ても同樣である。加之資本主義制度の末期である今日に於ては封建社會の末期に於けるよりもこのことが特に重要である。これ封建制度なるものは本來權力的統一を以てその本質とせるものであるに反し、資本主義社會なるものは本來利己主義、唯物主義を以てその本質とせるものであつてその末期に於ては社會的階級對立を激化し來るものである。且これが戰爭によりて如何に催進されるかは去る世界大戰の事實が敎へるところである。今日我國に於てこの戰爭が一方資本家階級に不當なる利益を與へながら他方國民大衆の犧牲を增大しつゝあることは憂ふべきことである。更に今日の日本の非常時局に處しつゝある國家權力の運用は遺憾ながら統一一貫を缺げる點が少なくないのである。このことが我國に對して少なからぬ不利を齎らしつゝある。この點も根本的に反省されなければならない。かくて今日の日本がこの危機を全ふせんとする以上先づ「天皇中心の國民共同體」の立場に立つて現代の國權的並に社會的諸制度を徹底的に變革し以て眞に國民的一致共同を確立しなければならない。これ今日が非常時であればこそ日本的なる國內變革を敢行しなければならぬ第一の理由である。

更に今日日本の戰ひつゝある戰爭は世界史の變革期に於て世界史を變革せんとする戰爭である。故に一度この戰爭がはじまつた以上日淸日露の戰爭と異なつて二年や三年にてその目的を達し得るが如きものではない。二三年の戰爭ならば、その貯へて居るところのものを用ふることを主としてでも無理をして戰を終ることが出來る。然し前途の見通しすら容易につかぬ長期戰である以上腰を据へてかゝらなければならない。卽ちこの戰時を平常時化して生產しつゝ戰ふて行く用意がなければならない。而してこの長期に亙つて日本國民が最大の精神的並に物質的の力を發揮し續けねばならない。然るに今日このまゝの國家權力運用の制度並に諸社會制度の下に止まつ

て居ることは國民の最大の力を發揮し得る所以ではない。故にこれを國民的最大の能力を發揮し得る制度に改めなければならないのである。これ現代非常時局に於て先づ國內的革新を斷行しなければならない第二の理由である。

更に今日日本がこの未曾有の非常時局に立つて居る所以のものは大なる世界史的使命を決行せんが爲めである。それは東亞に於ける白人の殖民地化を却け東亞の新秩序を確立せんが爲めである。このことは昨年十一月三日の近衞聲明に於て一國の首相によつて聲明されたのみならず、更に開院式の詔勅によつて全國民にとつて實踐的任務となつたところのものである。それは白人を搾取階級とする東亞の階級社會を否定して、そこに日滿支各々その個性を存分に發揮し得る東亞共同體を實現せんとするにある。これは容易ならざることであつて、正に共同體を以てその國體とするところの日本が指導的地位に立つて最善を盡す時にのみはじめて成就し得る大業である。自分は內に資本主義的階級秩序に歪曲されて居りながら外に白人による階級的秩序を變革せんとするが如きことはそれ自身自己矛盾であつて、かくの如き大業を到底爲し得べきところのものではない。この爲めには先づ自らの共同體的本質を現代の資本主義的日本に徹底せしめ國內に共同體的精神を充實しこの共同體的日本の行動としてはじめてこれをなし得るのである。これこの非常時に當つて日本が自らを先づ變革しなければならない第三の理由である。

要するに現代日本の國權的並に社會的制度の下に於ては、今日の非常時局が特に日本國民に求めつゝある國家權力の統一的な强力な運用も全國民の眞の一致團結も、國民の持久的最大能力の發揮も東亞共同體建設の指導國

民としての共同體的自覺も、不可能である。それは只だ「天皇を中心とする國民共同體」の立場に於ける國内革新を斷行することによつてのみ可能とするのである。かくて今日の日本は、明治維新の日本と同樣、國内革新の斷行を以てこの非常時に對する根本對策をはじめなければならないのである。依て先づこの革新の根本原理について次に革新の諸問題について述べることゝする。

二　革新の根本原理

今日高度に發展せる總ての國民に於ては社會的なるものの働と權力的なるものの働との別が見られる。前者に於ては諸の文化價値が生産されるのであつて、個々人はこの文化價値の生産に分業的に參加しかくて生産されたる全體の價値がこれに關與せし人々に分ち與へられる。これ諸種の文化社會である。後者に於ては國家權力なるものが最高原理であつてこれが全體を支配するところの構成である。前者は Kultursystem 文化體系と呼ばるゝものであるに對し後者は äussere Organisation 外的體制と云はれるものに屬する。

これ等のものは一國民の權力的活動と文化的活動であつて、この活動の主體たるものはその國民自體である。それは自然を同じくし民族を同じくし而して更に歴史と文化とを同じくするものである。

一國民の權力的構成並に社會的構成は本來その主體たる國民の活動としての構成である。而も權力面が支配的となれば一國民は全體主義的構造を呈し、社會面が支配面となれば個人主義的構造を呈する。かくて此等の面が自己目的となつて、主體の發展に矛盾し得る。この際主體が强固であれば、權力面又は社會面の構成を變革して

自己の進展を全ふする。然し若し主體の構造が薄弱であれば權力面又は社會面が主體の構造を破壞することとなり、國民の構造自體が全體主義的となり又は個人主義的となる。日本國民に於ては、主體の構造が强固であつて權力面又は社會面に破壞されることなくその主體性を一貫して發展し來りこのことによつて愈々强固なものとなつたのである。それは卽ち「天皇を中心とする國民共同體」なる構造である。

この「天皇を中心とする國民共同體」なるものは、大化の改新に於て成立したのであるが其後日本國民を一貫してその基礎的構造をなし今日にまで及べるものである。封建的な權力的制度もこの上に成立したのであるがその支配が「武家權を專らにし」この基礎的構造と矛盾するに至つてその主體性によつて否定せられ、資本主義的な社會制度もこの上に成立し今やその支配がこの基礎的構成と矛盾するに至つて變革されんとして居るのである。

この「天皇を中心とする國民共同體」なるものの構造を明にせんとせば先づ共同體なるものの構造を明にしなければならぬのであるがそれは全體主義的立場並に個人主義的立場に對比することによつて明となる。卽ち全體主義的存在に於ては權力的な全體が個々人を手段として用ふるのであるが、個人主義的存在に於ては個々人が全體を手段として用ふるのである。前者は全體主義國民に於て後者は個人主義國民に於て見られる構造である。かくてこの兩者にあつては共に個と全とが外的對立的な關係にあり、前者に於ては全が優位を占め後者に於ては個が優位を占めて居るのである。然るに共同體に於ては全と個とが內面的に結ばれて居るのであつて全は個を生かし個は全を生かすのである。卽ち全はそれに於てある總ての個をして各の性能を存分に發展せしめんとし、總ての個は全の爲めに各の性能を十分に發揮せんとするのである。[1)]

1) 拙稿『日本經濟學の根本原理』本誌七月號參照

この全なるものは一應莫然たるものであるが「天皇を中心とする國民共同體」に於ては、天皇がこの國民史を一貫せる中樞としてその歴史的全體を擔ふて居られるのである。かくて國民史の全體性は　天皇に於て體現せられ人格化されて居るのである。從つて共同體に於ける全と個との關係は人格的な愛の關係となるのである。これ卽ち　明治天皇が維新の詔に仰せられた「君臣相親しみて上下相愛」する關係である。換言せば　天皇は「天下億兆一人も其所を得ざる」ものなからしめることを以てその大御心とせられ國民はこの　天皇に對して自己の最善を致すのである。これ卽ち「克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ」である。卽ち同一なる全體に對して自己を盡す人々は「心ヲ一ニ」せざるを得ないのである。かくして全と個との人格的愛の關係に於て「天皇を中心とする國民共同體」なるものは最も强き統一力を有する共同體である。かくてこのものが日本の國民史の發展を通じて變ぜざる本體として確立されたところのものである。抑も發展なるものが可能なる爲めにはそこに變ずるものと共に不變なるものがなくてはならない。單なる變化は發展でないと共に單なる不變もまた發展でない。不變なる根本構造が自己を展開せしめて行くことによつてはじめて發展なるものが可能となるのである。我國民史に於てこの不變なるものが「天皇を中心とする國民共同體」である。これが不變なる傳統的な力として日本史を形成し進展しその變革期の危機を突破して進み來つたのである。今日の變革期に於ても、この立場に立ちこれを原理として處する外ないのである。

我國民史に於てはこの「天皇を中心とする國民共同體」が常に主體的な基礎をなしその上に經濟、教育、藝術等の諸種の文化社會が成立しまた政治軍事等の國家權力發動の構成が成立つて居るのである。諸種の文化社會はこ

の共同體の文化的活動の面であり、國家權力發動の構造は、この共同體意志の發動の面であつて、それが内に向ふては内政として外に向ふては外交軍事の形を以て發動するのである。かくてこれ等一切のものは「天皇を中心とする國民共同體」を主體とするところのその働であり用である。この主體はこの活動によつて自己を保持し發展して行くのである。かくてこの一切はこの共同體の爲めにあるものとして。これに矛盾することは許されない。

然し現實の歴史に於てはこれ等の活動面が屢々その主體たる「天皇を中心とする國民共同體」の發展と矛盾するに至るのである。この際主體たる共同體は自己を貫きこれ等の活動面を變革し以てその發展を全ふする。封建末期に於ては封建的政治並に軍事が「天皇中心の國民共同體」の發展と矛盾するものとしてこの立場より變革された。今日に於ては資本主義化されたる諸社會制度が我國民共同體の發展と矛盾するものとしてこの國體の立場より變革されなければならないのみならず國家權力發動の構成についても同樣に變革されなければならないものがあるのである。

要するに現代日本革新の根本原理は既に我國民史を一貫せる根本構造であるところの「天皇を中心とせる國民共同體」に於て與へられて居るのである。今日の社會制度並に國權運用の諸制度を革新すると云ふことは、この主體性を以てこれ等のものを貫くことに外ならないのである。

三　革新の諸問題

今日の革新は日本の國民生活を構成する三つのものについて考へられなければならない。第一はその主體たる

共同體についてゞある。

(一)國體の明徴　明治維新以來自己を白人に對して强化する爲めに西歐の市民社會文物の模倣に日もこれ足らざる有樣であつた日本は遂に我國體の核心である　天皇をも西洋諸國の皇帝の概念に於て考るに至つた。かくてその皇統が連綿であると云ふ時間的長さの相違は云はれるがその他と全く異なる本質は十分意識されなかつた。かくて我國體が西歐の君主國と同一視せられるに至りその結果國內的にまた對外的に重大な誤謬を侵すに至つた。例へば共產主義がロシヤのツアーを否定したと云ふことを以て直に治安維持法の我國體に對する必要理由となさんとすることにより我國體と帝政ロシヤとの區別を不明にする傾向を生じた。更に進んで獨伊の全體主義國家がこの共產主義國並に民主々義國と對立して居ると云ふことを以て我國と國體を同じくせるものであるかの如くに考へて、防共協定を讃美するものもあつたのである。かくて今日我國體を明徴ならしめんが爲めに、先づ必要なることは我國と國體を同じくするものの絕無なることを十分に意識することである。[1]

然るに今日の我國の革新の根本は「天皇を中心とする國民共同體」の精神を現代の社會面並に權力面に徹底せしむることである。この爲めには我國體を思想的に明徴ならしむることが第一である。それは今日屢々見られるが如く神話的に物語ることではない。かゝる仕方では他國人は勿論今日の日本の青年をすら承服せしむる力はないそれは學問的にも明にされなければならない。この爲には我國の歷史と西洋諸國の歷史との比較研究を盛にしなければならない。而も國體の體驗を國史上の偉人に於て見ることは甚だ大切である。この點につき最も深き國體の體驗と表現は　明治天皇に於て拜せられるのである。かくして得られる國體の體驗は哲學的體系にも高められ

1)　この校正に當つては既に獨ソ不可侵條約の締結が發表された。こゝにも我爲政者の無自覺が如實に示めされた。

なければならない。ヘーゲルが『法の哲學』に於て獨逸の「國家の哲學」を展開したが如く、我國體がこの哲學體系にも劣らぬ優れた體系に展開されることは國民の眞の教養の爲めにも極めて大切である。またかゝる哲學體系に於てそこに日本諸科學の立つべき基礎が置れるのである。またこの日本諸學建設の眞劍な努力の中に國體の哲學が進められるのである。かくて國體を眞に明徴にすることは今日の日本の學者の重要任務である。かくて眞に明徴されたところのものが國民の教養の中に取入れられなければならない。而して國民の總てはこの深き國體的自覺に立つてはじめて全體の爲めに最善を盡し得るものとなる。かくして現代日本の共同體的革新の眞の基礎が置れる。我國の革新は明徴されたる國體を實踐的に實現するより外ないのである。

(二)諸文化社會制度の革新　抑も人間生活には二つの要素がある。一つは人的要素であり他は物的要素である。一國の文化的活動も權力的活動もこの二つの要素を待つてはじめて可能である。この物的要素が單なる自然的な物ではなく多くはそれに人爲が加へられたものであると同樣に、この人的要素なるものも單に生れたまゝに育ひ立つた自然な人間ではなくこれに人爲が加へられたところのものである。自然の物質に人爲を加へて人間生活に必要のものを作り出すことは經濟的生產と云はれるものであるに對し人間に人爲を加へてこれを人間生活に適するものたらしむることはこれを廣く教育と云ふことが出來るであろう。國民共同體なるものが確立するにも何よりもこの經濟と教育とが共同體確立の爲めに適切なる物的要素と人的要素とを準備するに足るものでなければならない。この意味に於て來るべき共同體の準備期である今日この二つの文化域はどの文化域にも先立つて問題とされなければならない。而も資本主義的經濟制度はこの點についても重大意義を有する。

日本に於ける資本主義的經濟制度は明治維新以來その國體の立場より西洋に對して自己を强化すべく採り入れ來つたものであり、日清、日露の戰役の時代に於ては益々發展させられなければならぬところのものであつた。その變革が問題となりはじめたのはようやく世界大戰後に於てゞある。先づこの資本主義制度なるものは、人間の共同體的存在の實現の爲めに缺く可らざる準備をした。即ちその個人主義的な原理は、人々を中世の權力への盲目的服從より自覺せしめ自己の判斷に基いて行動するに至らしめた。かゝる自覺的な個々人を人的素材とすることによつて人間の共同體的存在ははじめて實現し得るものとなるのである。またこの制度は人々の利己心を刺激しこれを原動力として經濟を營ますことによつて生產力の未曾有なる增大を齎らした。この巨大な生產力によつてより高き共同體實現の物的素材が準備されることゝなるのである。然しこの制度の利己主義的唯物主義的原理は國民生活の一切を支配するに至り、國體思想と防共思想とを混同せしめたるのみならず、更に諸文化價値を商品化することによつて諸文化社會に於ける價値の生產並に分配を規定した。即ち今日の諸文化社會の根本特色は、個人主義的經濟制度を中心としその原理に規定される點にある。かくて先づ經濟社會の革新について述べる。

即ち近世の初めに於ける政治上の國民的統一組織の成立と相待つて資本主義社會は封建的な地方經濟を國民單位にまで擴大し更に世界的聯關にまで結んだ。この擴大されたる市場に對しては生產を大規模にすることが個人的な利益を齎らすことゝなつたが故に多くの大工場生產が發達したのみならず更にそれ等のものはカルテル、トラストの形に於て互に聯關統一せられ國民市場の占獨に向ふて進んだ。かくの如く資本主義制度の下に於て發達せし大規模生產とその聯關統一は正にその上に共同體的生產組織が成立すべきところの基礎となるところのもの

である。然しこの爲めにはこれ等生産設備の資本主義制度下に於ける私有私用の原理が共同體經濟の究極目的に合する樣に私有公用に轉換されねばならない。卽ち私有私用の原理は個人が私有し個人の利益の爲めに用ふると云ふ原理である。從つてこの下に於ては國民の自然勞働資本が私利を眼目として用いられるが故に、共同體全體の利益と矛盾するに至つたのである。これを是正せんが爲めに社會主義はこの私有を共有に移さんとしたのであるがこのことは私有を奪ふことゝなるが故に革命的混亂を惹起すること露西亞革命に於て見られたが如くである。かくて國民的エネルギーが浪費することになる。然るに財産について重要なるは有にあらずして用である故に私有はそのまゝにして私用を公用に移せばよいのである。而もこのことは有の變動と異なり、極めて暫進的になされ得るのである。私有者に對しては國民共同體が適當なりと考へる使用料を與へるのである。このことは私が早くから主張したところであるが[1]今や實現しつつあるのである。その最初の例は當初の電力法案であつた。卽ち五大電力會社の發送電の設備の私有はそのまゝにして置いてその使用については國家が公のためにこれを決定するのである。會社に對してこれまでの樣な利潤ではなく國家が適當なりと考へる額の使用料が與へられるのである。但し愈々實現した電力法案は當初のものよりも資本家の利益の爲めに歪められたがこゝに資本主義社會制度の私有私用の原理に對して私有公用の原理の方向が公然現れはじめたのである。今や總動員法案はこの方向を强化しつゝある。この私有公用の原理は資本主義經濟を共同體經濟に轉換せしむる爲めの重要な原理であつて、廣く産業資本、金融資本、保險等に適用されるのみならず國民自然にも適用され得る。例へばこれを土地に適用するには國家は一方各の土地の所有者はその儘にして置きこれまでの如き地代ではなく國民が適當なりと考へる使

1）拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第一九四頁以下參照

用料を與へ他方日本全國の土地を一體として國民共同體に對して最も有效なる用法を明にしこれに從つて小作人なり或は組合なりの土地の經營者に各々の土地を經營せしむるのである。かく國家は地主と土地の經營者の間に介在してその國土の用を共同體の爲めに最大ならしめることが出來るのである。この際國家は經營者より得る收入と、地主に對して與ふる使用料との差額を以て國民共同體の收入を增大しこれを國民の眞の必要の爲めに充て得るのである。以上の如くにして一國の自然生產設備が公の爲めに最大の用を發揮し得るのであるが、經濟的生產勞働も今日の樣に貧乏だから擔當するのではなく教育の實質的機會均等制度に結果する適材適所主義により擔當するのである。かくて國民の生產力を共同體の爲めに最大に發揮することゝなるのである。以上は共同體的生產についてであるが次に共同體的分配については少くとも生活に必須なる用はその人が共同體の成員としての分に背かざる限り保證されねばならぬ。分配についても大切なるは、用である。從つてそれは消費に關聯することゝなる。共同體的消費についても公用の原理が重要である。今日人間生活の諸種の物的設備は生產設備と同樣に益々大規模なものとなり從つて共同的に用ふべき性質のものとなりつゝある。共同體へ進むが爲めにはこの方向が益々進められねばならない。但し國民共同體に於ては、プラトー又はマルクスに於けるとは反對に、家庭生活なるものを人間の生活の爲めに絕對に必要なるものとして重ずるのである。故にこの家庭生活の爲めに眞に必要なるものはその限度に於て私用されねばならないのである。

かくして日本國民の經濟力は最大に發揮せられ、全國民生活の爲めに活用されるのである。

次に教育について考察しよう。先づ個人主義社會に於ては教育の目的をその結果得らるべき金錢的收入に於て

と考へ從て教育價値をも商品化する傾向が强く働くことゝなる。卽ち父兄は勿論本人も自分の個性を啓發すると云ふことよりも收入の多寡を標準として學校を選ぶことゝなる。これに對立し全體主義の立場に於ては人々を國家の手段として專らこれに盲從すべき道具として育てんとする。然し共同體の立場に於ては總ての人々が人間として持つて居る能力を遺憾なく發展せしめると共にこの能力をその個性に從つて全體の爲めに發揮すべき職分へ敎養するのである。かくして全か個を生かすと共に個か全を生かすところの共同體的原理が敎育を通じて實現するのである。

この爲めの學校敎育の構成について云へば、先づこれに必要な諸の學校が設けられることである。これを封建社會に比するならば市民社會に於ては多くの學校が設立せられた。これによつて共同體敎育への學校敎育設備は著しく準備せられたのである。但し今日の學校設備は尙ほ不十分であつて事情の許す限り必要なものを增設しなければならないのであるが、更にその全體をして共同體的敎育の效果を擧げる樣に統一組織することが必要である。

しかし今日の學校敎育制度の共同體敎育に對する最大の缺點は、學校設備よりも更にこの設備利用の仕方にある。この點についても中世に對する進步を先づ認めなければならない。中世に於ては秀れた學校の利用は武士階級以上のものに限られそれ以下のものにとつては寺小屋なるものがあつたに過ぎない。然るに近世に至つて何人も如何なる高い學校にも入學することが出來る樣になつた。この意味に於て中世は敎育の機會が均等でなかつたが今日は均等であると云ふことが出來る。然しこの敎育の機會均等は形式的なものである。共同體敎育に於てはこ

の點が改められ教育の實質的機會均等の原理が確立されなければならない。それは今日の如く金錢的な束縛に障害されることなく總ての國民がその能力次第に高い學校へ進み得るといふことである。卽ち全國の靑少年に對しては適切公平なる試驗を行ふことによりその各の能力に從ふてより高い適當な學校へ進み入らしめるのである。學校設備に制限がある以上志望者が溢れるなら試驗は是非やらねばならぬ。籤引によらんとするが如きは全く誤れる考であつて、その結果來るべき時代の日本國民を如何に無氣力なものたらしめるに至るかは明である。適切公平なる試驗によつて各の學校に入ることの出來たものに對しては國家が義務として狹義の教育費用のみならずこれに必要な生活費用をも負擔するのである。こゝまで行かなければ眞に國民教育といふことは出來ない。こゝにはじめて總ての國民は「學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就」する爲めの機會を眞に與へられることゝなる。かくて今日に於けるよりも遙に秀れたまた多くの人才が世に出るのである。天下億兆一人もその處を得ざるものなからしむることを以てその國體精神とする我國にとつてはかゝる教育こそが國家生活の眼目たるべきものである。故にこれに要する費用こそ眞に國家に必要な最も有意義な費用である。加之これを經濟的觀點のみより見るも今日浪費されて居る全國民の人的富源が此制度によつて開發せられその結果輩出するところの優れた政治家軍人學者經濟家等の國家に對する優れた貢獻はこの制度の爲めに要する國家の費用を補つて餘あるのである。この制度は速に產なき家庭の子弟より始めて實行に移されなければならない。今日の市民社會の唯物主義は物的資源をのみ高調し國家生活に最も大切な人的富源を浪費し爲めに多くの英才が徒らに葬られつゝあることは國家の爲め人類の爲め痛感に堪へざるところである。

次にこの教育設備を動かして行く教育者についてゞあるが、これについて特に重要な問題はことに小學校に於ける教育者の待遇が經濟的にあまりに低く且つ時間的餘裕のあまりにないことである。總ての國民にとつての義務教育でありまた總ての人々の幼き生命にとつての最初の學校教育として國民生活にとつて特に重要な意義を有する小學校教育の擔當者をかゝる狀態に置くことは共同體教育の許さざるところである。次に必要なことは教育者の自律と云ふことである。今日教育に全く無理解なる干渉が加へられ堪能なる教育者もその力を自由に發揮し得ない狀態にある。このことは小學校中學校に對しことに甚だしい。日本の教育機關を一體的に組成すると共に教育に於て優れた人々によつて組織される公の機構の下にその自律を確保することが必要である。かくてはじめて國民共同體教育の末通つた功果を全ふし得るのである。

次に醫療について一言せんに、醫療の缺如は今日一般民衆にとつての大なる苦痛である。これ現代の醫療設備は大なる進歩を遂げたがその利用は經濟並に教育と共に商品性の拘束を有するが故である。國家はその設備を更に發展せしむると共にその利用につき公用の原理を强化しなければならない。

要するに今日の諸文化社會制度の根本原理は何れも商品性の原理に立てるが故に、その進歩せる設備も國民共同體の爲めに用ゐられないのである。國家は先づこれを私有公用の原理に移し更にその設備を完備して公用の原理を徹底することが必要である。

(三)國家權力運用制度の革新　かくの如く諸文化社會の革新は共同體精神に基く正しき權力的活動に待つものが大である。加之國家權力はそれ自體政治司法外交軍事等に於て國民生活の重要な面をなして居る。この革新は

これに「天皇を中心とする國民共同體」の主體性を徹底し資本主義的並に全體主義的歪曲より解放することである。先づ國家意志が　天皇精神によつて貫かれ天下億兆一人も共處を得ざるものなからしむることを以て究極目的として居なければならないことは勿論であるが、更に　明治天皇の仰せられた「萬機公論に決す」と云ふことが眞に實現され國民共同體の總意が國家權力の發動に十全に表現されねばならない。かくて全が個を生かし個が全を生かし得ることとなる。今日の議會は未だこの目的に合して居ないのであるが、近世が齎らした國民單位の議會制度そのものは共同體への進歩に重要意義を有するものである。たゞそれが今日に於ては、資本主義社會に基礎付けられて居るが故に資本家の階級的利益が強く現れることゝなるのである。大切なことはこの議會制度を直接國民共同體に基礎付けることである。これがためにはこれを國民共同體の構成要素をなすところの諸共同體の人格代表者を以て組織することである。かゝる共同體は先づ農村共同體である。卽ち各の農村は自己を共同體として高めることに努め、その成員はその中よりこの共同體を人格的に代表すべき秀れた人を選出するのである。都市に於ては諸の職能團體が共同體的組織に高められる。例へば教育者の團體、藝術家の團體、諸種の工業生産者の團體等がそれである。これ等の共同體より同樣にして人格代表者が選ばれる。かくして選ばれたる人々は今日の職業議員とは全く性質を異にするものであつて依然この共同體の成員としてこれまでの生活を保有し議會に於てはその代表する共同體の人格代表者として自重し單に自分達の小さき共同體の利益を主張する爲めではなくむしろその共同體がそれに於てあるより大なる共同體の發展完成の爲めに最善を盡して眞に萬機を公論に決するのである。そのことが共同體の本質上それに於てある諸共同體を自ら眞に生かすことになるのである。かく諸共同

體の代表者により構成される議會は小なるものより國民議會に至るまでの段階をなして居りかくて國民共同體の總意が國家意志に十全に表現されることゝなるのである。かくして公論に決せられたところのものは、政府によつて實行に移されるのである。議會に於て決せられるところのものは主として國民總意の主要方向であるが故にこれを實行に移す爲めには多くの專門的な智識が必要である。この爲めには全國民中より選ばれたそれぞれの專門家によつて構成された諸種の審議會に議することが必要である。

更に政府の組織についていへば、今日は餘りに分化されすぎた爲めに大局的統一が失はれ國家に對して甚大な不利が齎らされつゝある。この點についても我共同體精神に基いて大改革が一日も速に斷行されなければならない。然らずんば、この非常時局に於て政府の對內的對外的行動を全ふすることは出來ないのである。

四　革新の原動力

以上は革新によつて實現せらるべき國民生活の構造について述べたのであるが、次にかゝる革新を實現する爲めの根原的な力となるものについて一言しなければならない。それは大化の改新ことに明治維新に於て最も顯著に示めされて居るが如く、我國民共同體の中心をなす　天皇よりの發動であると共にこの共同體の成員としての自覺に立つ國民の活動である。卽ち　天皇が「億兆の父母」として天下億兆一人も其處を得ざるものなからしめんとする大精神に對し國民は「赤子」としてこの親心を心として最善を盡すのである。こゝに變革期に於ける共同體的一體がある。例へば大化の改新に於て國を危くせんとする蘇我氏に對する鎌足の態度がそれであるが、明治

維新に於ける志士の活動はその典型的なものである。それは國民共同體の爲めに一身を捨てゝ働いたのである。かゝる立場は封建社會の士族であるとか町人であるとか云ふ樣な階級的立場に立つて居るのではなく、この階級的な立場を脱却して國民共同體の立場に立ち　天皇精神を體して行動したのである。そこに明治維新の志士と云ふものを吾々が仰いで誠に輝かしいものに打たれるのである。吉田松陰が「かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂」と歌ふている樣な力は決して階級的立場から出てくるものではなく、全く國民共同體の立場に立つて出て來るものである。かくの如くにして日本の歴史はその危機を通過して進展して來たのである。

このことは今日の資本主義社會の變革期に處しても同樣である。この革新の原動力となつて働き得るものは、諸種の權力者階級であるとか社會的階級であるとか云ふ階級的意識を脱却して、眞に「天皇を中心とする國民共同體」としての我國體を自覺しこの國民共同體の立場に立ちこの共同體を自己の生命としてその發展完成の爲めに最善を致す人である。かゝる人のみがこの現代の革新に眞に貢獻し得るのであつて、それは日本國民が眞に日本國民としての本務を忠實に實行することより外ないのである。こゝに現代日本革新の眞の基礎が置かれるのである。革新がかゝる公明正大な態度に於て爲されるところにも我國體の精華が存するのである。